

St. Luke's International University Repository

Learning through symposium and group session styles - A new teaching method designed to increase student comprehension through the use of the team approach to terminal and hospice care.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 射場, 典子, 酒井, 禎子, 小松, 浩子, 外崎, 明子, 及川, 郁子, 川越, 博美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/381

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ターミナルケアにおけるチームアプローチを理解するための演習方法の試み — シンポジウムとグループセッションによる学び —

射場 典子¹⁾ 酒井 禎子²⁾ 小松 浩子³⁾
外崎 明子¹⁾ 及川 郁子⁵⁾ 川越 博美⁶⁾

要 旨

ターミナルケアにおけるチームアプローチは、どのような援助を行う上でも重要な概念であり、患者とその家族の全人的苦痛を緩和し、クオリティ・オブ・ライフの向上をめざして提供される。本学のカリキュラムでは、3年次前期に「人間と環境の相互作用の回復・保護」として位置づけられるターミナルケア論（講義2単位、演習1単位、必修）の中で「ターミナルケアにおけるチームアプローチ」について授業を展開してきた。しかし、これまで学生の特長、講義法の限界などから教育方法にいくつかの課題が残されていた。

本稿では、今年度、これらの課題を検討し、チームアプローチの理解を深める教育方法を考案し、新たな試みとして取り組んだので、その経過と結果について、学生による評価を含めて報告する。

キーワード

教育方法、シンポジウム、ターミナルケア、ホスピスケア、チームアプローチ

I. はじめに

本学では1995年度に「豊かな教養と感性を備えた人間形成の追求と、看護専門職者としての成長」¹⁾の2つを目的としたカリキュラムの改正が行われ、3年次前期に「人間と環境の相互作用の回復・保護」として位置づけられるターミナルケア論（講義2単位、演習1単位、必修）が展開されている。今年度、ターミナルケア論では、「人生の終末期にある人とその家族に対して、人間としての尊厳を保ちつつ、その人にとって、生と死が有意義なものになることをめざしたケアの理論と方法について学ぶ」ことを目標におき、講義と演習を構成し、実施してきた（表1）。本稿では、昨年度より課題であった①臨床経験が少ない学生にとって医療や福祉の場におけるチームという概念の理解が難しい、②講義法ではチームアプローチというダイナミ

ックな概念の理解、すなわち現場のリアルな状況を伝えることが困難であるという点をふまえ、効果的な教育方法について検討し、新たな試みに取り組んだので、その結果を報告する。

II. ターミナルケア論における「チームアプローチ」の授業の位置づけ

ターミナルケアにおいてチームアプローチは、どのような援助を行う上でも重要な概念であり、interdisciplinary team（多職種による合同チーム）によるケアはターミナルケア、特にホスピスケアの特徴ともいえ、他の領域の看護にも適用できる基本である。inter-disciplinary team は、いわゆる multi-disciplinary team（多職種チーム）とは区別され²⁾³⁾、チームメンバー全員が患者とその家族のtotal pain（全人的苦痛）を緩和し、quality of life（QOL）の向上をめざし、意思統一のために行われる話し合いの過程を重視してケアを進めていく。そのスタイルから、ターミナルケアの場面で有効だとされている。

このような内容を含んで昨年度は「終末期にある人・家族へのチームアプローチ」について講義を行っ

- 1) 聖路加看護大学 講師（成人看護学）
- 2) 聖路加看護大学 助手（成人看護学）
- 3) 聖路加看護大学 教授（成人看護学）
- 4) 聖路加看護大学 教授（小児看護学）
- 5) 聖路加看護大学 教授（地域看護学）

表1 1999年度 ターミナルケア論 授業内容と構成

4月		5月				6月			7月				
概論①	概論②	家族の体験	概論③	苦痛と援助①	苦痛と援助③	演習Ⅱ	→	家族のサポート	チャプレンの立場から	子どものケア①	演習Ⅲ	→	→
演習Ⅰ	→	→	在宅ターミナルケア	苦痛と援助②	リエゾンナースの立場から	→	→	臨死期のケア	子どもの死	子どものケア②	→	→	→

た。しかし、ターミナルケア論を担当した複数の教員による科目の評価において、臨床経験の乏しい学生にとって実際のチームの活動はイメージしにくいいため、講義でチームアプローチについて教えることには限界があるのではないかとということが話し合われた。このことは以前からも指摘されてきた点であった⁴⁾。また、講義ではダイナミックなチームアプローチの醍醐味を伝えていくことの難しさも話し合われた。

そこで、学生がチームアプローチについてよりよく理解するには、一回の授業で取り上げるのではなく、すべての授業の中でチームアプローチの必要性を強調して内容に織り込んでいくことや演習方法を工夫し、学生が実際のチームをイメージできるような方法を開発していく必要があると考えられた。

1998年度までターミナルケア論では演習単位1単位15時間を用いて3つの演習を行ってきた(表2)。これらの演習は、学生が実際に死を身近なものとして見つめたり、ターミナルケアの行われている場の特徴を理解したり、ロールプレイを通してターミナルステージにある人の全人的苦痛に直面してケアを行ってみるという内容で、ターミナルケアを理解する上では重要なものであった。しかし、現在の医療現場における患者のプライバシーの保護という観点から演習2の「ホスピス見学」については、見学が可能な場が限られており、ホスピス病棟の共有部分の一部を短時間見学した後、スライドを見ながら病棟婦長の話を聞くという内容となっていた。ホスピスはターミナルケアにおけるチーム医療が理想に近い形で行われている場であり、見学演習の意義は大きいですが、一方で学生からは見学前の期待が大きいくだけに、時間をかけてその場に向かうことに疑問を感じるという意見も少数ながらあった。科目の目標達成のためにより有効な方法を模索していく必要もあり、今年度は見学を見合わせるようになった。

また、演習1は昨年と同様の内容、演習3では事例検討(ロールプレイでのケアの提供という内容を含む)を計画し、実施した。

表2 1998年度 ターミナルケア論 演習内容

<p>演習1：終末期にある人とその家族を理解するために、手記を読み人間にとっての生と死の意味について具体的に理解し、そのケアについて学習する。</p>
<p>演習2：終末期にある人とその家族のケアの場を理解するために、ホスピスの見学を通して、ホスピスケアを受ける場の特徴とケアのあり方について学習する。</p>
<p>演習3：終末期にある人と家族のケアの実際。ロールプレイングを通して、生と死を育む援助について探求する。</p>

Ⅲ. 新たな演習の目標と方法

新たな演習方法は、学生がチームアプローチについて現場の生の声を聞くことを通して、チームによる活動をダイナミックに捉えてもらうことやチームアプローチの面白さや現実的な意味についての難しさを理解してもらうことを意図して検討された。そして、実際に多職種のチームメンバーが一堂に会して、一つの問題についてそれぞれの立場で意見や情報を交換したり、ケアの方向性を議論する場面を見せる方法が提案された。しかし、現実的にはチームアプローチを行っている場に出向くことは困難であるので、学内で多職種のチームメンバーによるチームカンファレンスの再現を行い、チームの一員としてどのようにチームアプローチを行っているか、またどのように連携しているかについて討議している場面を見せようということになった。

表3に示したように演習の具体的な目標を設定し、講師はターミナルケアにおけるチームメンバーとしては最も典型的な3つの専門職種(医師、看護婦、ソーシャルワーカー)とボランティアを選択した。また、授業の形態は、学生全員が参加するシンポジウム形式(1コマ)と学生の興味ある職種別にグループに分かれて内容をより深められるようなグループセッション

表3 演習2の目標

ターミナルステージにある人とその家族を支えるさまざまな専門職者とボランティアによるシンポジウム、それらのチームメンバーとのグループディスカッションを通して、ターミナルケアにおけるチームアプローチについて理解する。

【具体的目標】

1. ターミナルケアにおいてなぜチームアプローチが必要か、チームで関わる意義は何か理解する。
2. 人生の終末期にある人とその家族に対して実際にどのようなチームアプローチが行われているか理解する。
3. 施設ホスピスの場で多職種によって構成されるチームの中で、特に、医師、看護婦、ソーシャルワーカー、ボランティアなどのチームメンバーが現状でどのような役割を果たしているか理解し、現状の問題点と今後の展望を明らかにする。
4. 以上のことからターミナルケアにおいて効果的なチームアプローチを行うために看護婦はどのような役割をとる必要があるか考察する。

(1コマ)という形をとり、各々のセッションで得られたこと、現状の問題点と課題についてグループごとに発表し、共有する(グループワーク1コマ、発表1コマ)というスタイルをとり、4コマを使って目標達成できるように計画された。

IV. 演習の実施

演習の準備は、シンポジストの依頼から始まった。前述したような専門職・ボランティアで実際に都内近郊のホスピスに所属してチームアプローチを実践している方々に依頼した。ホスピスを選んだ理由としては、学生にターミナルケアの場としてのホスピスについても学んでほしかったこと、シンポジストが意見交換するときに土台となるケアの場に共通性が見出せることがあげられた。第一優先として学内の非常勤講師の先生方に依頼するとともに、なるべく異なる施設からさまざまな現場の状況を伝えてもらえるように配慮して人選した。特に学生が馴染みの浅いソーシャルワーカーについてはホスピスケアの経験が豊富な講師を考えて依頼した。

依頼の際には、前述してきたようなこれまでの課題や今回の演習を計画するまでの経緯、演習の目的を電

話で説明し、承諾を得た。また、シンポジウムで話していただく内容については、電話と文書を用いて、演習の流れとシンポジスト一人当たりの持ち時間、テーマ、そしてなるべくチームで働く現場の状況をイメージできるような事例を含めてお話しさせていただきたい旨を前もって伝えた。そして、演習当日に、顔合わせと演習の進め方の最終確認を行った。

学生には演習の2週間前に演習要項を配布し、演習の目的と方法について説明した。その際にグループセッションで参加したい職種グループの希望を募り、自主的にグループの進行係、記録係、発表係を決めるように促した。また、参考文献を提示してチームアプローチについての事前学習を促すとともに、学生にとって馴染みの少ないシンポジウムの目的、方法、参加のしかたについてもオリエンテーションを行った。

さらに、演習をより効果的に行うための場や時間の設定を行った。シンポジウムを行う教室は普段講義に使用されている縦長の部屋であったので、シンポジストと学生間の距離を縮め、学生が質問しやすく、シンポジスト間のやりとりを肌で感じられるように、教室を横長に使用し、机なしで椅子のみを並べる設定とした。

時間については、通常の授業時間の枠を超えて、180分を有効に利用できるように配慮した。すなわち、当日は2コマ続きでシンポジウムとグループセッションを企画した。シンポジウムでは4人に20分ずつ発言してもらった後、シンポジスト同士のやりとりや質疑応答のために20分の時間を設け、15分間の休憩の後、グループセッションの時間は70分とれるように計画した。そして、1週間後、グループごとに発表準備をして、発表を行うように計画した。

当日は、担当教員の1人が司会を行い、シンポジウムが進められたが、各シンポジストの発言時間が予定を超過したため、質疑応答の時間が短縮した。さらに、その時間調整に伴いグループセッションも40分程度となった。グループセッションは学生の自主的な運営に任せられたが、各グループに調整役として教員が1名ずつ入った。

翌週に行われたグループ発表では、講師と身近にディスカッションした内容について、資料を配布したり、OHCを使用するなどして発表された。また、発表後に学生間でいくつかの質疑応答がなされた。

V. 学生による演習の評価

演習終了後、学生による演習の評価のアンケートを実施した。学生の承諾を得て、以下に結果を述べる。アンケートの回収率は86.9%であった。

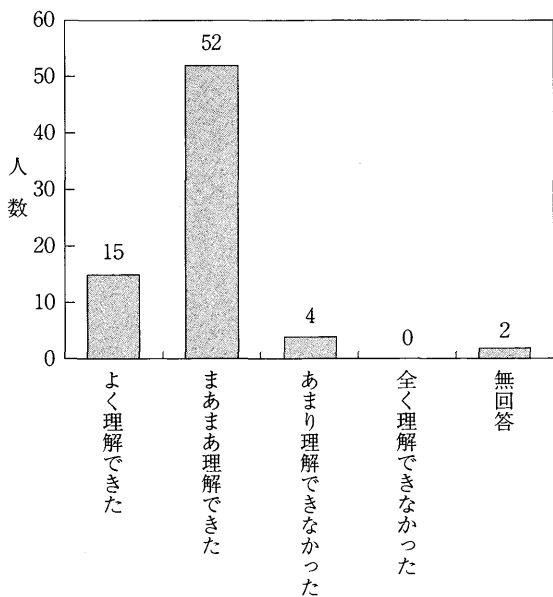


図1 学生による演習全体の評価

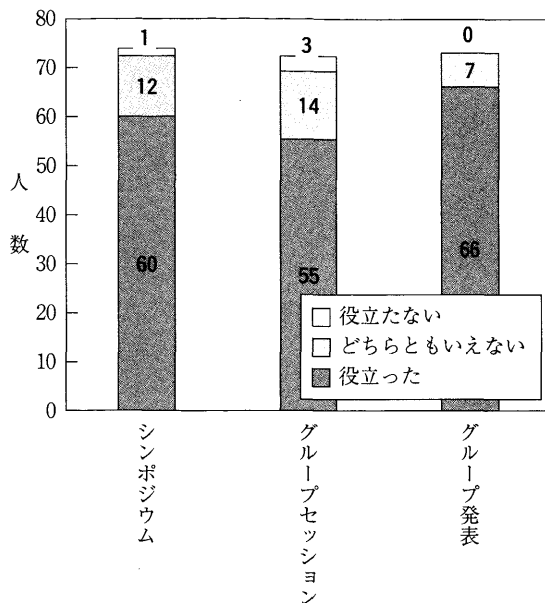


図2 学生による各演習内容の評価

1. 演習全体に対する学生の評価

「今回の演習全体を通してターミナルケアにおけるチームアプローチが理解できたか？」の質問に対して、67名(91.8%)の学生がよく理解できた、まあまあ理解できたと回答していた(図1)。その主な理由として、「これまでの学びでは看護婦の立場ばかりであったが、実際に話を聞くことでソーシャルワーカー、医師、ボランティアといういろいろな立場の思いが伝わってきた」、「それぞれの職種の違いとチームの一員としての役割がとてもよくわかった」、「ボランティアやソーシャルワーカーのチーム医療への関わり方が具体的にわかった」、「チーム医療はまだ難しい、まだよくわからないという感想を持ったことを含めてよくわかった気がする」、「現場で働いている人の話を聞いて、グループセッションで自分たちなりの考えを持てた」などが述べられていた。その一方で、「チームアプローチの理想は理解できたが、具体的に患者にどのように影響するのかまだはっきりしない」、「考えを深めたり、共有する時間が少なかった」、「各々の働きは理解できたが全体としてどう絡み合っているのかが見えなかった」、「それぞれの病院、それぞれの立場によって考え方が違うので難しかった」などの意見もみられていた。

2. 各演習内容に対する学生の評価

次に、演習の内容それぞれについてチームアプローチを理解するにあたって役立ったかどうか聞いたとこ

ろ(図2)、シンポジウムについては「役立った」と回答した学生が60名(82.2%)で、その理由としては、「看護婦だけでなく、さまざまな立場の意見を比較しながら聞いた」、「多職種の役割を包括的に考えさせられた」、「講義を受けるよりわかりにくいチーム医療が現場の生の声を聞いて自然と理解できた」、「シンポジスト同士の反応が見られたのでシンポジウムならではないと思った」、「ソーシャルワーカーやボランティアの話はとても新鮮で考えるきっかけになった」、「実際に関わっている方の生の姿と声に接することができた」などであった。また、「どちらともいえない」が12名(16.4%)、「役立たなかった」が1名(1.4%)で、その理由の多くは「学生から質問できる時間が必要だった」、「発言の時間が長すぎた」、「シンポジスト間で意見交換が少なかった」、「シンポジスト間の考え方のずれが気になった」、「休憩が少なく疲れた」などの時間的な問題とコーディネーター不足を指摘していた。

グループセッションについては「役立った」と回答した学生が55名(75.3%)で、その理由としては、「より興味のある人に詳しく話を聞くことができた」、「小さいグループで講師を身近に感じることができ、積極的に質問できた」、「小グループだったので講師も的確に質問に答えてくれてよかった」、「意見交換しやすく理解が深まった」、「他職種の前では言えないことを言っていた」などであった。

また、「どちらともいえない」が14名(19.2%)、「役立たなかった」が3名(4.1%)で、その理由とし

ては「もっと小さいグループが望ましい」、「質問に対して要点を得ない答えが返ってきたり、聞きたい話が聞けなかったように思う」、「時間に余裕がなく理解を深めるところまで至らなかった」などがあった。

グループセッションを共有する場としてのグループ発表については「役立った」と回答した学生が66名(90.4%)で、その理由としては、「みんなで話し合うことで自分自身の考えていなかったことを他の人によって気づかされた」、「グループによって出されていた課題も違っていたので共有できてよかった」、「発表や質疑応答によってチームアプローチの理解が深まった」、「シンポジウムで聞けなかった各職種の思い、立場、本音を知ることができた」、「みんなが作った資料がわかりやすかった」、「主体的に勉強できる」などがあった。

また、「どちらともいえない」が7名(9.6%)、「役立たなかった」という学生はいなかった。理由としてあげられたのは「発表準備のため、小人数の人に負担をかけてしまった」、「出された意見を並べるだけなら発表の内容は資料にして配布するだけで十分」、「時間が長すぎたように思う」などであった。

3. 演習についての感想

感想としては、「お話し下さった方々の働く場はチームアプローチが比較的進んでいるが、現実には厳しいものがあると思った」、「なぜ医療の場では同じ病院という組織、病棟というところにありながらチームで行うことが難しく、努力しなければ得られないのかと考えさせられた」、「とてもためになった。現状から問題点として上がったことに自分がどう関わって改善していけるか考えていきたい」、「チームアプローチ以外でもとてもためになったような気がする。セッション後(看護婦グループ)やる気に満ちた」など内容について感じたことに加え、「医師、看護婦、ソーシャルワーカー、ボランティアという席順が気になった」、「OHPが見にくかった」、「テーマを絞った話がなされればもっとよかった」、「時間が超過したことでゆっくりグループセッションの時間をとれなかったことが残念」、「シンポジストが2名くらいでじっくり聞けてもよかった」、「グループワークと発表の時間設定を1週間空けるなど検討してほしい」など、改善に向けてのさまざまな意見が述べられていた。

VI. 教員による演習の評価

演習終了後、今回の演習を担当した教員でミーティングを行い、学生のアンケート結果もふまえて演習を評価した。ディスカッションされた主な内容は①演習

の目標達成状況、②演習の進め方に関する事、③学生の演習への参加状況についてであった。

1. 演習の目標達成状況

まず、演習2の目標として掲げた内容のうち、具体的目標1のチームアプローチの必要性和意義については、シンポジウムのテーマとして各々の立場から語られており、グループ発表の内容から判断して学生の理解度は高かったと推測される。

次に具体的目標2、3で掲げたチーム内で医師、看護婦、ソーシャルワーカー、ボランティアの個々のメンバーが現状でどのような役割を果たしているかについては、シンポジウムに加えてグループセッションではより具体的な役割に迫ることができ、学生のアンケート結果や発表内容からもよい学びができたと考えられる。また、実際にどのようなチームアプローチを行っているかという点では、シンポジストが臨床での事例を紹介したことで、どのようなメンバーがそのケースに関わったか、どのような援助が行われたかについては理解できたと考えられる。しかし、結果的にそのような援助がなされるに至った話し合いのプロセスなど有機的にチームが絡み合って協働していくことについての理解は、表面的なレベルに留まったと考えられる。

さらに、具体的目標の3、4に掲げたチームアプローチに関する現状の問題点と今後の展望については、興味のある職種に分かれて行ったグループセッションとその後の学生同士のグループワークを通して検討できていたと捉えられる。学生のアンケートから、グループワークはシンポジウムやグループセッションで感じ取ったことを共有し、整理していく場として有効であったと評価できる。

2. 演習の進め方に関する事

演習の進め方については、まずシンポジウムの時間超過の問題が上げられた。事前の調整不足もあり、当初、1人につき20分と予定されていた発言時間は、経験豊かなシンポジストが学生に伝えたい現場のリアルな状況を語るには短すぎたのではないかと考えられた。今後は、時間に見合ったシンポジストの人数を検討していく必要があるだろう。また、グループ発表の時間については4グループが発表して質疑応答するには少し長すぎたという意見とともに、グループ発表の必要性の検討に関する意見も出された。

場の問題としては、シンポジストと学生との距離を縮める目的で教室を横長に用いたことはよかったが、反面、視聴覚教材を用いた際にはスクリーンが真横となって見にくかったので、今後、改善が必要である。

全体の演習の構成については、最初の2コマをシンポジウムとグループセッションに合わせて柔軟に用いた点はよかった。しかし、グループワークとグループ発表の時間が2コマ続きになってしまい、発表準備のために時間が有効に用いられなかったので、発表の時間や方法については課題が残されている。

3. 学生の演習への参加状況

シンポジウムへの参加状況としては、全体的には興味を持って話を聞いていたようだったが、予定の時間を超過してからは疲労している様子が感じられ、眠ったり、集中できなくなった学生も見受けられた。そのため、質疑応答の時間も質問が少なく活発でなかったのが残念だった。一方、職種別のグループセッションでは学生が興味あるグループに参加しているという動機づけもあり聞いてみたいことがいろいろあったようで事前に質問を考えてきており、質疑応答や意見交換が積極的になされていた。20名程度というグループの大きさも参加しやすい大きさだったと考えられる。グループ発表については発表係の数名が中心になって主体的に進めていた。発表後の質疑応答はそれほど活発ではなかったが、素朴な疑問や感想は理解を深めることにつながっていたと考えられた。

VII. 今後の課題

今回の演習は、学生のアンケート結果からもわかるようにターミナルケアにおけるチームアプローチを理解する上では役立つものであったと考えられる。しかし、より効果的に実施するために、いくつかの改善点が考えられる。まず、シンポジストに依頼するテーマはより具体的なもので、できれば同一の問題について提言をしていただけるように前もって十分な調整が必要であろう。今回のテーマは、シンポジストによってさまざまな切り口が考えられる内容だったため、あまりに欠けたと考えられる。さらに、質疑応答の時間を十分にとって、会場（学生）と4人のシンポジスト間のやりとりを促進する必要があったと考えられる。

また、計画の段階ではシンポジウムで現場の状況を聞くこと、目にするところからの学びは大きいと予測されたが、学生のアンケート結果からは各職種とのグループセッション、発表に向けてのグループワーク、発表の場でお互いに刺激し合いながら理解を深めていった過程も重要であることがわかった。今後は時間の設定も考慮に入れたうえで、一人一人の学生がより主体的に学習を進めることができ、体験的にチームアプローチを理解していけるよう改善を重ねていきたいと考えている。

さらに、今回、演習の目的は「チームアプローチ」の理解であったが、シンポジストから語られた事例から、学生はtotal pain, QOL, ホスピス、その人らしさを大切にされたケア、家族への援助などを考えることができ、科目目標で掲げたターミナルケアの基盤となる概念や方法を学習するという意味においても有意義な演習であった。今年度、科目目標を達成するための内容と方法を検討していく際に、学生が自主的に関心を深め、体験的に理解し、自ら考え、実際のケアに結びつけられることをめざした。今回の試みはその一端であり、今後も内容の改善が必要である。

VII. おわりに

ターミナルケアが提供される医療現場においては、死に直面した人が抱えるさまざまな複雑な問題を解決し、QOLが向上するように他職種とチームを組んでいくことの必要性が叫ばれている⁵⁾。ターミナルケア論の授業が学生にとって、現状を知ることにとどまらず、将来、自分たちが何をなすべきかを考えることができ、チームの中で効果的に役割を果たしていくために「他の保健医療メンバーといかに協力して実践するかを思考し、判断し、状況の変化に柔軟に応じながら新たに状況を生み出していくことのできる看護の基本的能力」⁶⁾を育んでいけるように、今後も教育内容と方法を検討していきたいと考えている。

引用文献

- 1) 菱沼典子ほか：聖路加看護大学1995年度改訂カリキュラムについて、聖路加看護大学紀要，22，pp.113-121，1996.
- 2) I. Ajemajan：The Interdisciplinary team, pp.17-28, Oxford Textbook of Palliative Medicine, 1993.
- 3) 恒藤暁：最新緩和医療学，pp.6-10，最新医学社，1999.
- 4) 小松浩子：看護学におけるターミナルケアの教育を試みて，医学教育，24(5)，p.327，1993.
- 5) 渡辺孝子：死に直面している人への看護—現在の課題，Quality Nursing，3(8)，pp.772-776，1997.
- 6) 聖路加看護大学カリキュラム検討会：大学における看護教育カリキュラム：第1部—聖路加看護大学カリキュラム試案の基礎—，日本看護科学学会誌，10(2)，pp.49-57，1990.

Learning through symposium and group session styles— A new teaching method designed to increase student comprehension through the use of the team approach to terminal and hospice care

Noriko Iba¹⁾, Yoshiko Sakai¹⁾, Hiroko Komatsu¹⁾, Akiko Tonosaki¹⁾,
Ikuko Oikawa¹⁾, Hiromi Kawagoe¹⁾

The team approach is a key concept in terminal and hospice care. An inter-disciplinary team approach is necessary to provide palliative physical, psychological, social, and spiritual care of dying patients and their families. The result of this approach in providing care, we believe, improves the quality of life of both the patient and the family.

In St. Luke's College of Nursing curriculum, the concept of the team approach has been included in the course on terminal care (a 3-credit requirement in the third year). However, because of changing the student' characteristics and limitations of the lecture teaching method, discussions of issues regarding teaching methods have encouraged a more intensive look at this concept.

In this paper, we will discuss a new teaching method, which we believe increases teaching effectiveness—the team approach to terminal and hospice care. We will also discuss the results of implementing this method and the students' evaluation of the method.

Key words

teaching method, symposium style class, terminal care, hospice care, team approach

1) St. Luke's College of Nursing